
MONSTER HUNTER ~紅嵐絵巻~

Monster Hunters !

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MONSTER HUNTER ～紅嵐絵巻～

【Zコード】

Z0796W

【作者名】

Monster Hunter's!

【あらすじ】

個性派暴走メンバーの集い、つまりサークル『Monster Hunters!』のリレー小説！

執筆メンバーは
『キヨン』
『蒼崎れい』
『獅子乃心』
『サザンクロス』

『LOST』

の五人でお送りします！

舞台はMHP3rdでおなじみの“ユクモ村”！

個性派執筆メンバーの長編リレー作品、とくどく覗あれ！

第1話（著・キヨン）

世界とは、広いだろうか。

否、狭いだろうか。

それは、人それぞれにより感じ方は全く異なるのだ。同じような考え方であろうと、それは似て非なることとなるのだ。

十人十色とはまさにこのことだらう。最も、“世界”という一つの括りにしてしまえば十人では済まない。何十億、何百億という“個性”が現れるのだ。

さて、冒頭に戻ろう。

世界は広いか否か。自分で言えば、後者だ。
世界が狭いとはよく言ったものである。

物語は、そんな“世界”の中で始まる。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！――！――！

満月の星が輝く夜。

一匹の狼が高らかに雄叫びを上げる。

その余りの大音量に草に止まっていた光蟲や雷光蟲が光と共に飛

び立つた。

月の光と小さな命が生み出す光が、その“狼”的姿を顕にする。

強靭な発達を遂げた荒々しく躍動する四肢。甲殻は鋭く立ち上がり、合間に見える鱗は鮮やかなライトブルーの光を反射する。頭部には一对の角。その下に構える狼の顔。

蒼天に轟く剛雷を模したその姿は、まるで「ことなき“雷狼竜”」。

「ヤマト！ ランシユ！ ナデシコ！ 覚悟はオーケーだろうな？」

「勿論ですニヤ！」

「言われなくとも最初から出来てるわよ！」

「問題ありませんニヤ」

“雷狼竜”は闇夜の中、四つの影を田んじめた。

一つ、否、二匹のアイルー。防具を着込み、その手には己の得物を一つ。

一人の女性は据わった瞳で「」を構えて。

もう一人の男は、背にある大きな刀、「太刀」を引き抜き目の前の“雷狼竜”を見抜く。

「行くぞオッ！」

男の一聲と共に、両者が一步踏み出す。

その村は、山の中腹辺りにあつた。

* * * *

“モンスターハンター”と

。

ここは、人とモンスターの暮らす弱肉強食の“世界”。
人は皆、この世界のことをこう呼ぶ。

周りを岩に囲まれた村は、モンスターの侵入を頑なに拒む、言わば　大袈裟に言えばだが　要塞。

最も目に付くのは、村の頂上にある大浴場。六角形の屋根を四層に組み上げ、村の中で最もな大きさの建物は、村のシンボルマークとも言える、温泉マーク　炎のマークとも言えるが　　を称え、常に湯煙を上げていた。

村の名は、『ユクモ村』。

温泉に恵まれたこの村は、日々客足の途切れることを知らない。ハンター、商人、旅人……職業柄は様々だが、沢山の人々からこの村は愛されていた。

大浴場を一つ、南に降りた所の右手には、クエストポートがあり、少なからず依頼が数日に一度更新される。

クエストから帰ったハンター達は、ユクモ村の代名詞とも言える温泉で汗を流すのだ。

逆の左手には、村のハンター用の宿舎が設置されている。ランク分けはされていないが、皆平等な部屋となつており、武器等をしまえるボックスも常備され、かなり使い勝手は良いものだ。

その横手には、訓練所へ続く道がある。

駆け出しや、基礎復習に来るベテランハンターまで、様々なハンターが足を訪れる場所だ。

指導をする教官は、厳しい且生徒思い。わざわざこここの教官の稽古を受けに来るだけの者もいたりする程だ。

こここの知名度も中々に高かつたりもする。

それらの更に一段下。

右手には加工屋。

左手には雑貨屋がある。

加工屋の主人は竜人族の老人。

左手に、ドスフロ、ギイの皮で加工された手腕袋を付け、いつもハンマー片手に仕事をする元気なおじいちゃんだ。

ユクモ村限定の武器を創作したりと、竜人族ならでは知識は健在で、日々武具と向き合う姿は加工屋の手本となるに違いない。

左手の雑貨屋では、ハンターの基本となる回復薬から書物まで、様々な物を常時取り扱う、ハンター必須の店だ。

その広場では、他の商人達も店を構えている。この辺りでは滅多に取れない虫等も売っているものだ。時々開かれる半額祭では、村中の人人が集まることも暫しはあるとかないとか。

その広場を西に抜けると、ユクモ農場と呼称される農場がある。鉱石、魚類、キノコ……沢山のものを採取できる、緑溢れた所だ。

奥には、『ニヤンタークエスト』という物も設置されている。

これは、オトモアイルー達だけがクエストを受注し、狩場へ向かうという、ギルドでも最近可決されたものだ。

「オトモだけで狩猟させるのも良い修行だ」と、オトモアイルー達を出させるハンターも多いのだ。

村としての集落もきちんとあり、農場へ行く途中に右に右折すれば村人達の元気な姿を見られるのは間違いない。

「ふつはあ～！ やつぱ風呂上がりの一一杯はこれに限るッ」

場所は村でも一番大きく高い位置にある大浴場に戻る。腰にユクモ村特製の入浴用の『履物』『ニアミシリーズ』を着けた健康な茶褐色の肌の男 村雨 翔はドリンク屋特製の『ミラクルミルク』を腰に手を当てぐいっと一杯煽った。温泉で火照った体に内側からミルクの冷たい感覚が広がる。これこそが、彼にとっての至福の一杯であるのだ。

「（）主人はいつも皿そうに飲みますニヤア」

彼の横では猫 獣人族のアイルーが翔と同じミルクを舐めるようくチビチビと飲んでいた。猫は上品に飲む、とよく言われるが、このアイルーの場合は“可愛く飲む”が妥当であろう。

「ヤマトお、風呂上がりってのは豪快に一杯行かなきゃいけねえつづつ捷があるんだぞッ」

「ニヤニヤツ！？ ご主人、それは誠ですかニヤツ！？」

「俺は嘘を言わねえ！」

「これは彼らの勝手な“捷”です。

「なあコウル！ お前もそう思うよな？」「ですニヤー！」

ドリンク屋のアイルー 「コウルに勝手なことを言つ翔だが、コウル自身は迷うことなく頷く。

ドリンク屋の商売はおいしい商品を客に楽しんでもらうことにより、いつも来てくれる翔には中々頭が上がらないのだ。

「さあ、てと。ヤマト、そろそろ行くぞ。今日はクエスト更新日だ」「了解ですー」

ミラクルミルクを飲み終えた一人と一匹はコウルにお礼を言つて大浴場を後にする。

翔はインナーの上に防具『ユクモシリーズ』を身に纏う。防具、というよりは民族衣装に近いかかもしれない。和風のイメージに固めた外見は赤や黄色に彩られていた。普通に村人達と比べても遜色は無い。それでいて守るべきところはきちんとカバーするのが防具である。

現在は頭部は着けておらずに自分の家に置いてきている。武器も同様にだ。

アイルーであるヤマトもオトモアイルー専用の防具を着込む。これも翔の『ユクモシリーズ』と同じ物だ。

オトモアイルーとは即ち、クエストに“お供”することから“オトモアイルー”と言われている。

ギルドの規定では最近になって一人で一匹までオトモアイルーの動向が許可されるようになつた。これによりハンター達は殆どがオトモアイルーを一匹連れて行くのを見掛けるようになつたものだ。

しかし、翔の場合はオトモを増やしたりはせず、ヤマトとのコンビを崩さないでいた。

戦力の増強も良いかもしけないが、慣れないまま狩猟に行くのも

危険だし、まことにまで危険な狩猟も無いだろ？』といつ意見だ。

大浴場を出て階段を南に下る。
頭上には紅葉の木があるが、まだ紅葉狩りに行くまでは言えな
さそうだ。

それでも近い日に行けるような雰囲気にはなり始めている。

ユクモ村と言えば“温泉”でもあり、“紅葉”もある。繁殖期
その内の秋となると紅葉が赤い色を付けて美しく舞い落ちるの
だ。それを見にわざわざユクモ村へと観光に訪れる人も珍しくない。

その紅葉をいつも眺めている人物が一人。
和風の着物を着こなし、優雅に座りながら道行く人々に笑顔を振
りまく女性。

「久御門村長」

翔が彼女に手を振ると向こうも柔らかい動きで返してくる。

翔が“クミカド村長”と言った通り、彼女こそがここ『ユクモ村』の村長、
久御門市である。

「翔様、お湯加減の方はいかがでございましたか？」
「最高つですよ。風呂上がりの一杯がそりやもう旨かった！」

美味しそうに飲むジェスチャーをする翔に市もコロコロと笑みを
こぼす。

「そう言えば村長、クエストの更新つてされてるっすか？」
「いいえ、まだでござりますよ。ですが今日中には新しいのが来ますでしょーから」

「この村では大きな街のように毎日クエストが更新されることはなく、殆どが数日に一度の更新となっている。
クエスト、と言つても極稀に中型モンスターが出現する程度でそこまで害はなく、この村に一時滞在するハンター達によつて難なく討伐されてきたので村は今のところ安全だ。

「そんじゃ、更新されたらまた来ます」
「お待ちしております」

最寄りのクエストが無いようなのでここは一旦後に。更新まではしばらく時間を潰そつかと、翔は更に南へ下つてユクモ農場を目指した。

「ニヤ、カケル様にヤマト様ですかニヤ」

木でできた頑丈なつり橋を渡り終えるとそこからがユクモ農場だ。そのユクモ農場を一人一匹で管理するアイルー。名をセバスチャン。アイルーの中でもユクモ1優秀と言われている程で、ユクモ農場の管理をそつなくこなすエリートアイルーだ。

「うつすセバスチャン。収穫はどうだ?」

「可もなく不可もなく、と言つたところです」

でもまだこれからです」
「ヤ、と先を期待するように言つた。繁殖期
ももう間近である。その時こそが収穫ピーク。期待が高まるのも無
理はない。

「ちよつといこいや。暇だからなんか手伝わさせてくれよ。ヤマトもこ
るし」

「手伝わせていただきます」

意気込み良べビシッと背伸びをするヤマト。「ようじくお願ひし
ます」
「ヤ」とセバスチャンもペコリと頭を下げてから作業を始めた。

「カケルは網の引き上げ。ヤマトはキノコの収穫をお願いします」

ヤ

「うつし、任せろッ」

「いつも頑張る」

「ハーネは畠と蜂蜜のトコヒこります」
何かあつたら声をかけてほ
しです」

「心（一）ヤ（一）」

「んしょ、んしょ……、つと。おおー、こりや結構じゃ大漁じゃね
えか！ カクサンデメキンにバクレツアロワナ……小金魚。古代魚
レアモンだな」

「…………む。」のキノ「は……、パク。…………」「、ヤツ、マヒ、ダケ……」「、ヤ、ツ……」

「んあー……」れは……、S A S I M I U O ……貰つて
いいだろうか……」

「…………（ビクッビクッ）」

「…………お一人ともビうしたのですか」「ヤ……？」
「取り乱した（ニヤ）」「
「さ、さいですか」「ヤ……」

一時的に暴走しかけた一人と一匹。偶々様子を見に来たセバスチヤンがなんとか事態を收拾させ、二人に別のことをするように指示を出した。

「何ツ！？ 僕は釣りがしたいぞツ」「
「僕はなんでも大丈夫ですニヤ！」「
「ハア…………もう好きにして良いですニヤよ…………」

ユクモ農場管理猫セバスチャン。実はユクモ村1の苦勞人アイドルだつた
りする。

* * * *

しばらく農場でお仕事というか手伝いというか邪魔かわからない
ことをした一行は再び村長の市の下を訪れていた。

「村長、何か依頼クエストはありましたか?」
「はい。実は 溪流 に“リオレイア”が現れまして……」
「リオレイア!?」
「冗談でありますよ」

ズルツ、と翔とヤマトは盛大に口ヶた。

“リオレイア”

通称“雌火竜”と呼ばれる飛竜を代表するモンスターだ。雄の空の王者の異名を持つ“リオレウス”と並び立つ陸の女王。突進やプレスを多様する飛竜で、その尻尾には猛毒の針が付いている。大型モンスターに属する典型的な形の飛竜種だ。

「村長へ、驚かさないで下さいよ～」

「そうですニヤー！」

翔とヤマトはまだリオレイアを見たことは無いが、その驚異だけは知っている。

小さな村がリオレイアたつた一頭だけで壊滅するのも珍しくはないのだ。

「うふふ、お一方共いつも新鮮な反応が返って来ます故面白いのですよ」

□元に手を当てて口ロロロと笑う。

村長、久御門市。完全なうである。それも、“ド”が付くぐらいいに。

「真剣な話にいたしますと、渓流に“アオアシラ”が現れました」

“アオアシラ”は牙獣種に分類される中型モンスターだ。堅い手腕に付いた鋭い爪の一撃は初心者ハンターがまともに喰らえればノックアウトは免れない事実である。

先程説明した“リオレイア”などの脅威よりはずつと楽であるが、

油断ならないモンスターだ。

「生憎」には翔様しかハンター様がおられません。 溪流 は村にも近いですからいつ被害が出るかもわからないのです。」

それに、と市は更に言葉を付け足した。

「何やら 溪流 がいつもより感じが違うとこう報告も受けています。アオアシラの討伐は無理でも、調査をお願いしたいのですが…」

…

市の声が少し沈む。彼女の勘が警告音をガンガンに鳴らしていた。

「任して下さいよ村長… アオアシラなんてちょちょいのちょいで撃退してやりますから!」

「安心するニヤー！ 僕どこの主人なら余裕ですニヤー！」

そんな村長の不安を吹き飛ばすように翔とヤマトは胸をドンと叩く。ここは自分達に任せて村長は堂々と村長らしくしていくくれ。無意識にそんな感情を一人（？）から感じた。

彼らなら出来る。心の奥は直感的にそう告げた。

「……それでは、お願ひしますがよろしくでしょうか？」

「応…」「承ったニヤー」と頬もしい返事をする翔とヤマトに市は「よろしくお願ひいたします」と頭を下げた。

『アオアシラの狩猟』

クエスト内容：アオアシラ一頭の狩猟

報酬金：1200z

契約金：100z

指定地：渓流

制限期間：2日間

主なモンスター：

- ・ジャギィ
- ・ジャギイノス
- ・ガーグア

クエストLV：

成功条件：

- ・アオアシラ一頭の討伐、捕獲、撃退のいずれか
- ・渓流 の調査

失敗条件：

- ・狩猟続行が困難の場合
- ・タイムアップ

依頼主：久御門市

第一話（著・キヨン）（後書き）

初めましての方は初めまして！

お久しぶり、もしくは、先日ぶりだね、な方、『』をよ。

今回第一話を担当させていただいたキヨンです。

この度は『MONSTER HUNTER～紅嵐絵巻～』をじ覽
いただきありがとうございます。

サークルを代表してお礼申し上げます。

この作品はリレー小説と云ひで一人一話を担当し、全員一周で
一章を目指します。

長い長い道のりとなりますが、最後まで（あるかどつかわからぬ
けど）おつかれあこめりしくお願ひします。

さて、次話担当は『マガジンマガジンマグス・マグヌス
～』でおなじみの“蒼崎れい”様です。
次回もよろしくお願ひいたします。

それでは！

サークル総括者“キヨン”

第2話（著：蒼崎れい）

翔はクエストを受注した次の日、オトモのヤマトを伴って、日の出前から狩り場に向けて出発した。

移動はガーグアという走る能力に優れた丸っこい鳥に、車を付けた鳥車と呼称される乗り物である。ユクモ村周辺の地域で広く普及しており、近辺では最もポピュラーな乗り物だ。

そんな鳥車の荷台には、ユクモ装備に身を包んだ翔の姿があつた。背中には、昨晩入念に手入れした愛刀 骨刀【犬牙】の姿も見受けられる。

「ヤマト、寝れる内に寝とけよ。アオアシラといつ戦う事になるか、わからんねえからな」

「了解ですニヤ」

鳥車の荷台に揺られながら、翔はヤマトに声をかける。
ひとたび現場に足を踏み入れれば、そこはすでに人の世の理が通用しない世界だ。

たつた一つだけ存在する絶対のルール　　“弱肉強食”に全てを支配された、文字通り死と隣り合わせの空間。一瞬の油断も、命取りになりかねない。

安心して眠れる内に、ありつたけ寝ておかなければ。

翔とヤマトを乗せた鳥車は暗闇に彩られた森をかき分け、一路目的地を目指した。

翔とヤマトが目を覚ましたのは、今回の狩猟場である渓流に着いてからだ。鳥車の操縦をしていたアイルーが、起こしてくれたのである。

「ふうう、ここに来るのも久しぶりだぜ」

そう言つて翔が目を向けるのは、広大な自然と清流に囲まれた【渓流】と呼ばれるフィールドだ。

青々と茂ったユクモの木々もさることながら、一番の特徴は透明度の高い清らかな水であろう。

この水は近隣の山に降った雨水が時間をかけてろ過されたもので、【渓流】のあちこちで湧き出でては、近くを流れる川へと注いでいる。飲み水としても重宝されており、渓流にこれだけ大量の縁が育まれているのも、ひとえにこの水のおかげと言つても過言ではないだろう。

「久しぶりって、先週も来たばかりですニヤ

「あれ、そうだったか？」

「繁殖期【春】の渓流名物、特産タケノコ狩りですニヤ。本当に忘れたのですかニヤ？」

「ああ、さっぱり」

まず翔とヤマトは、ベースキャンプに設置されている青いボックステと歩み寄つた。

このボックスには、現場でハンターの役に立つアイテムが保管されている。管理を行つてるのは、ハンターズギルドと呼ばれる組織だ。

ハンターズギルドとは、クエストの発注、モンスターの生態調査、乱獲の防止、危険なモンスター（主に古龍種）の監視などを主に行つてゐる、巨大なハンター支援組織の事である。

全てのハンターはハンターズギルドに登録されており、腕の良いハンターには、ギルドマスターから直々にクエストを依頼される事もあるらしい。

このベースキャンプに貴重な補給物資を届けているのも、彼等ハ

ンターズギルドなのだ。

翔はボックスの中から応急薬や砥石を取り出すと、意気揚々と溪流の奥深くへ消えていった。

村長から受注したクエストは、アオアシラの討伐・捕獲・撃退のいずれか。もう一つが【溪流】の調査だ。

あのドジな村長の話によると、今年の【溪流】はどうやらいつもと様子が異なるらしい。

今回の狩猟対象であるアオアシラは別名“青熊獣”と言い、読んで字の如く熊のような出で立ちをしたモンスターである。

最初の繁殖期には冬眠から目が覚め、餌を求めて溪流に多く出没するのであるが、今年はなぜか例年より目撃情報が多く寄せられているのだ。

山中に開墾された畑、街道を行き来する行商人達、果ては近隣の村々まで。目撃情報は後を絶たない。

それで今回、ユクモ村の村長である久御門市くみがといちが、アオアシラへの対処と異変調査のために、翔にクエストを依頼したのだ。

「ヤマト、そつちの様子はどうだ？」

「特に変わった様子はないですニヤ」

翔とヤマトは周囲を警戒しつつ、しかし臆する事なく湿った大地を踏みしめる。

一人と一匹が探しているのは、アオアシラの大好物であるハチミツだ。運搬されているハチミツ狙つて、街道の荷車を襲う事もあるらしい。

近くで見張つていれば、高確率で発見できるはずである。と、その矢先、翔はあるものを見つけた。

「おい、ヤマト。ちょっとこっちに来てみろよ」

「なんですかニヤ？」「主人」

ひょいひょいひょいとヤマトが駆け寄って来た所で、翔は自分が見つけたものを指指した。

「間違いねえ。アオアシラだ」

「でつかい足跡ですニヤ」

巨大と言つほどでもないが、比較的大きな部類に入るだろう。翔とヤマトはその足跡をたどつて、更に奥へ 日の光をほとんど遮るような深い森の中へと入つて行つた。

奥へ奥へと進むにつれて、足元を覆う雑草が増え始め、ついには足跡も消えてしまう。どこかにアオアシラの痕跡がないか、翔とヤマトは必死に探した。せつかく見つけたのだから、無駄にはしたくない。が、残念ながら周囲にそれらしい痕跡は発見できなかつた。だがその代わりに、芳醇かつ甘い香りをヤマトがかぎつけたのである。ユクモ農場でもよくかぐ事のできる香りだ。

「ご主人、ハチミツの匂いですニヤ」

「ヤマト、それマジかっ！」

「マジですニヤ」

きりりーんと、翔にウインク。

そして指差した先には、倒れた樹の幹に巨大なハチの巣があつた。それも、両手で抱えきれないほどの大きさである。

「ナイスだぜヤマト！」

「ふつふつふつ。このヤマトを見べびつてもらひちゃ困るのですニヤ。」この程度、朝飯前ですニヤよ

「まあ、どっちかと言つと、もうすぐ昼飯前だけどな

きゅるる～、と翔のお腹が空腹を訴えた。そういうば、【溪流】に着いてからかなりの時間歩き回つている。

到着した時にはすでに真上近くまで口が昇つていたので、そろそろお昼ご飯の時間には違ひない。

翔は大きなハチの巣を視界に納めながら、遠く離れた高台へと移動した。

「さてつと、そんじやまあいつただつきま～す

本日の昼食は、「ノハとササコお手製の焼き魚弁当だ。ユクモ名物の大浴場に併設された集会所で、受付嬢をやつているあの二人である。

農場で取れたてのサシミウオが丸々一本入っていて、一秒たりとも待ちきれない。

翔は迷う事なく、焼きサシミウオへとかぶりついた。

「んぐんぐ、うめええええっ！」

さすが、取り立てだけあって美味しい。

「ヤマト、お前も食べろって」

「おお、じ主ーー！」

と、半分以上身の無くなつた焼きサシミウオと、おにぎりを一つやつた。

一人と一匹は受付嬢お手製の弁当をあつとこいつ間に平らげる、消臭玉で身体の匂いと弁当の匂いを書き消す。

アオアシラの嗅覚は、それだけ鋭敏なのである。もしかしたら、これでも見つかるかもしれないが、まあそこは運に任せるとしかない。

「そんじゅやマト、見張りを頼んだぜ」

「了解ですーー」ヤ。このヤマト、「主人の為に一生懸命頑張るですー

ヤ

「あと、ペイントボールな。見つけたらこれを当てろよ
「わかつておりますーー」ヤ。ではじ主ーー、気を付けてーー」

「おおよ

翔は周囲の地形を入念に読み取りながら、【渓流】の更なる調査に向かうのだった。

「うーん、確かにちょっと変だな」

入り口付近ではわからなかつた事が、【渓流】の奥に進につれてだんだんとわかり始めてきた。

小型モンスターの数が少ないものである。

ジャギィやジャギノス、それにガーヴァの数が明らかに少ない。「いや、これは少ないっていうよりも……」「

森の浅い方へ移動してんのか？

よくよく思い返してみれば、確かにベースキャンプの近くに小型モンスターが多くつたような気もする。

偶然なのか、もしくは村長の言つようになにか異変が起きているのか。

「つー？」

翔は慌てて、茂みのそばに身を屈めた。先ほど視界になにかが映つたような気がしたのだ。

物音を立てないよう、そつと顔だけを出してみると、

「……あれ、ドスファンゴじゅねえか……！？」

あの特徴的な白い毛と灰茶系の毛。見間違えるはずもない。

今回の狩猟対象であるアオアシラと同じく、牙獣種に属する中型モンスターだ。四足歩行で鋭く尖つた牙を持が特徴の、巨大なイノシシのようなモンスターである。

「村長お、ドスファンゴが出るとか聞いてねえよ」

翔は小さな声で愚痴をこぼしながら、ドスファンゴの動向をうかがう。ドスファンゴ程度なら狩れない事もないのだが、今回の対象はあくまでアオアシラだ。

それに、狩猟許可の出でいないモンスターを狩るのはギルドの規約に反するし、なにより無駄な殺生はしない主義だ。あと、翔の今実力や装備では、ドスファンゴを狩った後にアオアシラと相対するのが難しいのも事実である。

視線を一転に固定したまま、翔は逃げるチャンスを待つ。緊張の

ために防具の裏にびっしょりと汗をかき、体力がガリガリと削られる。

「……ふうう、まだか？」

翔は大きく息を吐き出し、新鮮な空気を肺いっぱいに取り込んだ。発見してからずつと、ドスファンゴに動きはない。こつちに氣付いて動かないのか、それとも単に寝ているだけなのか。

ん？

「いや、寝ているにしちゃあ、動きがなさすぎるよくな……」

翔は目を凝らし、注意深くドスファンゴを見るが、やはり微動だにしない。

緊張で張りつめていた思考はいつの間にか不審感へと置き換わり、翔の足を前へ前へと誘う。

始めは小さかつたドスファンゴの姿がどんどん大きくなり、不審感が大きくなる。それと共に、吐き氣をもよおす生臭い臭気が鼻孔へとなだれ込んで来た。

「もしかして、こいつ！？」

不審感が更に確信へと転じ、翔はドスファンゴへと駆け寄った。

正確には、そのなれの果てに。

「…………どうなつてんだ、こりや」

その燐々さんさんたる状況に、翔は絶句せざるを得なかつた。

予想通り、ドスファンゴはすでに死んでいたのである。それも、事故や老衰ではない。

何者かによつて狩られていたのだ。

「なににやられたんだ？ この辺じゃ、大型モンスターなんてめつたにお目にかかるないのに」

ドスファンゴは腹の肉の大部分が喰われており、これが異臭を放つていたのだろう。

それ状態から見て、ほとんど一撃だ。ドスファンゴは背中付近の焼け焦げた部分が大きく陥没している以外は、これといった外傷は見られない。

「焼けてるって事は、火かなんかか？」

翔は村長の言つていたリオレイアが、本当にいるんじゃと思つた。だが、中型モンスターでさえあまり見る機会がないのだ。その線はないだろ？。

それにリオレイアほどの大型モンスターがいるならば、絶対に田撃者がいるはずである。なんせ彼女らは、空を飛べるのだから。

翔は気を取り直して、調査を再開する。

他に気になつたのは、虫の死骸がドスファンゴの近くに多く落ちている事だ。

見たところ、雷光虫のよつにも見えなくはないが、少し違つとうな氣もある。

「まあいいや。とつとヤマトの所に戻るか」

調査とやらも、このドスファンゴのお陰でかなり進んだ。

翔は不審なドスファンゴの死体を見送りながら、その場所を後にしてしまった。

だが、翔はたつた一つだけ気付かなかつた事がある。

雑草に覆われて見えにくくなつっていたのもあるが、その近くには

鋭角的な形をした大きな足跡がいくつもあつたのだ。

翔はその後も、周囲になにか変化がないか確認しながら、ヤマトの待つ小高い茂みの中へと戻つた。

「ヤマト、そつちの調子はどうだ」

「ご主人、お帰りですニヤ。こちらは見ての通り、まだなのですニヤ」

「どうやら、まだアオアシラは現れていないらしい。夜間の狩獵は視界が悪いので、できる事なら明るい内に現れてくれればいいのだが。

翔とヤマトは時折水分を補給しながら、ただひたすら待つ。待つ時間に比例して、体力と精神力がどんどんすり減っていく。もう間もなくすれば、真っ白な陽光も赤く染まるだろう。それから時を置かずして日は沈み、夜の闇が地上を支配する。

その前までには、決着をつけたいのだが。

「ヤマトオ」

「なんですかニヤ、ご主人」

「まだかなあ……」

「まだですニヤア」

それから五分後。

「そろそろかなあ……」

「どうですかニヤア」

そのまた五分後。

「ここで待つて大丈夫かなあ……」

「そればっかりはわからないですニヤア」

更に五分後。

「もう帰りてえ……」

「ご主人、もう少し待つてみるのですニヤ」

元々待つのは得意でない。それも手伝つて、全身がうずく。

ズン……。

できる事なら、今すぐにでも全身を動かしたい気分だ。

ズン……。

そんな翔の願いが通じたのか、ずつしりと重く、それでいて軽やかな足音かな地響きがする。

いよいよ、待ちに待つた狩猟の時間だ。

スシ！

ただし、一人と一匹が思い描いくほど、自然の摂理は優しくでき
てはいない。

「アーティスト」

— はいですや！

翔とヤマトは茂みから跳び出ると、急な斜面を一躍散て翻げりた。

「一瞬前まで一人と一四かいた場所を
言ひ手をした豊の三厚な仄
がえぐつた。

翔とヤマトは急な斜面を駆け下りた所で、武器に手をかけながら背後を振り返った。

翔は骨刀【大牙】をヤマトはホーンオービック構え
まで自分達がいた場所を見上げる。

ギイみてえにはいかねえぞ」「

一四七

大きい。立ち上がれば六メートル半はありそうだ。アオアシラの平均サイズから比べて、大きめである。

アオアシラは大きく一鳴きすると、巨体からは想像もつかない俊敏さで、一気に斜面を下つてきた。

のタックルをかわす。

攻撃をかわされたアオアシラは、すぐさま翔の方へと振り返った。単純にヤマトより翔の方が、エサとして美味しそうに映った。そ

れだけの事である。

鋭角的なターンを決め翔に向かつて飛びかかると、太くたくましい前足を一直線に振り下ろした。

「一いつ！！」

翔は臆する事なく、斜め前方へと走り出す。重厚な爪が地面に突き刺さった音を背に、すれ違いながら骨刀を走らせた。

「ちつ」

だが、アオアシラにほとんどダメージはない。斬れ味が足りないのである。表層の毛を少し斬っただけだ。

しかし、はなから一撃で仕留められるとも思っていない。

「ヤマトオー！」

翔はヤマトの元に駆け寄りながら、合図を出した。

「はいですニヤー！！」

ヤマトが取り出したのは、ペイントボールだ。

桃色をしたボールはヤマトの手から放たれると、無防備に背中を向けたままのアオアシラの下半身を直撃した。

ボールからは蛍光色の粉末が飛び出し、アオアシラの毛に貼り付く。それでも貼り付かなかつた粉は、空気に乗つてゆうりりと宙を舞つた。

これで少しの間は、例え逃げられたとしても追跡が可能である。

「グガアアアアアー！！」

アオアシラは再び身をひるがえすと、後ろ足で立ち上がった。やはり大きい。太刀を振り上げても、頭まで届くかどうかというサイズだ。

だが、翔もヤマトも怯える事なく、アオアシラへ向かつて走り出した。相手の一拳手一投足に、全神経を集中させる。前足を頭上近くまで振り上げ、袈裟斬りに何度も振り下ろす。雑な上にすいぶんと直線的な軌道だ。

しかし、一発でもかすれば命の保証はない。

翔とヤマトは、そんな一撃必殺のブローを全てかわしながら、再

び背後に回り込み右の後ろ足に斬りかかった。

ここは刃が最も通りやすい場所であり、同時にあの重量を支える大事な部分でもある。

だがやはり、

「こいつうつ！？」

「一ヤニヤツ！！」

一筋縄にはいかない。

翔の骨刀は表層の毛を多少斬り落とした程度、ヤマトのボーンネットピックも分厚い毛の層に阻まれてしまう。

「伏せろ！」

叫びながら、翔はヤマトを抱いて伏せた。

と、数瞬もしない内に、アオアシラの右前足ブローが頭上を通り過ぎる。

翔はまだ前足が振り抜かれている最中に、反対方向へ素早く転がつて難を逃れた。

「くそっ、ユクモノカサガ！？」

先ほどの一撃で、ユクモノカサガのカサの部分が削り取られてしまつた。

帰つたらどうにかしないとなあ。直せるかな？

とかなんとか思つていると、さつきまで前足を振り回していたアオアシラは、すでに前傾姿勢でこちらを睨みつけている。

「ガウアアアア！！」

右前足を振り上げながら、飛びかかってきた。

翔は体勢を立て直すと左側へサイドステップしながら、突きだして来た前足へと刃を走らせる。

ガガガガと、まるで岩でも斬つているような感触が走つた。

「ちきしぇう、かてえ！」

攻撃で削れた腕甲が飛び散り、顔や腕にちりつと痛みが走る。腕甲を斬つた衝撃で、腕が痺れる。

だが、問題はない。

「シサリの困ぬるが、アマナリ」

そこへ、翔の後ろからたつぱりと助走をつけたヤマトが、大きくジャンプした。

ヤマトはそのまま綺麗な放物線を描きながら、振り返ったアオアシの顔面へと着地する。

「ご主人！ 今ですつ！ ニヤツ！」

視界を奪われたアオアシラは、ヤマトを振り払おうと立ち上がる

てぶんぶんと首を振つた。

これを必死でかわす。

「ナイスだヤマトー、もうひとつだけ頼むぜ」

「ヤアッ！ ザーッ！」 金田は叫んで立った。

翔は脇刀を地面と平行になるように構え、突きの体勢になると、

線でなく点で攻撃する突きなら、いくら毛が厚かろうと固かろう

と、問題ない！

はああああああああああ！」

翔は脇の下に骨刀を構えたまま、勢いよく走り出す。ヤマトのおかげで背中を向け、攻撃するのは後ろ足。

ヤンスだ。

「それでも喰らえ！」

さくっと、骨刀の先端がアオアシラの左後ろ足に突き刺された。

と、その瞬間、アオアシラの動きが変わった。

今までの 翔達を反響していたものと違う入り交じつた咆哮。翔の突きが効いた証拠だ。

だが、ダメージを与えた事で生じた一瞬の油断が命取りだった。自らを傷付けた者を薙ぎ払わんと、乱暴に振るわれた前足。その一撃に対して、ほんの少しだけ反応が遅れてしまった。

「やべつー？」

骨刀を引き抜き、上体を反らしながら大きくバックステップする。
「つ痛うー！」

だが、重厚な爪が翔の右肩を捉えた。

幸い一ミリほど表面が裂けただけである。ただ範囲が少し広い分、派手に血しぶきが飛び散った。

「グラアアアアアアア！」

血の臭いに興奮したのか、それとも手傷を負わされた事に対する恨みか、ヤマトを振り払つたアオアシラは、一直線に翔へと突進してきた。

だが足のダメージのためか、先ほどより動きは遅い。

「ご主人には手を出させないニヤアツー！」

振り払われたヤマトは、しかしあきらめる事なくアオアシラへと向かっていく。

ボーンネットピックを反対に持つと、先ほど翔が突き刺した場所へ柄を突き込んだ。

「ガウツーー！」

分厚い脂肪の層に阻まれはしたもの、アオアシラは痛みに悲鳴を上げ、地面に激突する。

「ヤマト、一旦退くぞー！」

「はいですニヤー！」

肩の傷も早く止血しなければ。翔は煙玉を取り出すと、地面に投げつける。

青から赤に変わり始めた空の下、白い煙が【渓流】から立ち上つた。

第2話（著・蒼崎れい）（後書き）

おそらく、ここに会つの方は全員初めてだと思います、蒼崎れいです。

というわけで、紅嵐絵巻の第一話を担当させていただきました。本格的な二次創作は初めてで、けつこう緊張します。モットーは原作の世界観を大切にです。

モンハンを文章で書くのって、けつこう大変ですね。あと、地の文がいっぱい。まあ、どれだけ筆舌を尽くしても、あの映像美を表現するのは難しいんですが。

まあ、そんなわけで今後ともよろしくお願いします。

次話は主にノクターンで活動していらっしゃるハセガワハルカ先生です。でわ、次回担当の回でまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0796w/>

MONSTER HUNTER ~紅嵐絵巻~

2011年11月12日08時26分発行